

Japanese Language Teaching in Nauru During the Occupation : Focussing on Materials in Japan and Australia

Toru Okamura

Tezukayama Gakuin University

The actual conditions of Japanese Language Teaching in Nauru during the occupation has never been examined. Our concern is how it was performed in Nauru in 1940s. Chapter II, focussing on materials in Japan and Australia, attempts to illustrate that there was a close contact between Nauruan and Japanese. The following chapter shows the nature of Japanese language teaching at school.

日本軍占領下におけるナウル島の日本語教育¹⁾

—— 日豪の資料を中心に ——

岡 村 徹

帝塚山学院大学

1 は じ め に

この論文は、日本軍占領下におけるナウル島の日本語教育の実態を体系的に論じるものである。

近年になって戦争体験記の類が数多く出版されるようになったが、山口（1998：73）は、「——正直言って私は戦記というものがあまり好きではない。それは戦記のほとんどが素人が書いたもので、客観性が薄いということからくる。戦後、数年あるいは数十年を経て記憶がいささか曖昧になってから書かれたものが多く、自分史であることとあいまって、玉碎史でさえその悲愴さを美化してしまうようなきらいもある。——」と述べている。実際、書物によっては、同じ事柄に言及する場合でも数字や内容そのものが違ってくる場合がある。したがって、ある地域の戦争について論じる場合、日本側だけの、あるいはオーストラリア側だけの資料に基づいて検討するのは一方通行的にならざるをえないことになる。双方の資料を突き合わせ共通点と相違点を明らかにし、相違点に関しては慎重に取り組まなければならない。

ナウル島の場合は、中島（1986：9）も述べているように日本の戦史にはほとんど記録されていない。その理由について中島は大槻（1985）を取り上げ次のように述べている。ナウル島が戦史から脱落したのは、（1）「復員後、司令をはじめ各高級将校たちは第二復員局（海軍担当）に報告書さえ提出していない。提出してあれば、防衛庁戦史室か厚生省にも記録が残っているはずだ。」（2）「ナウル、オーシャン部隊で戦犯として処刑された将兵の数は定かでない。」のためであると結論づけた。日本側の資料不足に関しては筆者のインタビュー調査により、ある程度補完された。

第一次世界大戦下においても、日本海軍にナウル占領の意図がなかったのにもかかわらず、シドニーで発行されている『パシフィック・アイランズ・イヤーブック』にはそれと逆の内

1) 由井（1998：78）では、「日本語教育」と「国語教育」の概念について、「分析の枠組み」か「分析の対象」かの区別をまず確認しておくべきであると述べている。

容が記されている（中島 1987: 22-23）。

したがって、双方の人々の証言、戦争体験記、民族誌、戦史などを集め、比較検討・分析する必要があるであろう。しかし日本側の資料は先も述べたように不足している。今後の課題として今も恐らく健在であろうと思われる人々に聞き取り調査を行ったり、1990年代になって数多く出版されるようになった戦争体験記などを根気よく収集していく必要があろう。本論では日豪の資料を中心にナウル島での日本語教育の実態を体系的に明らかにすることを試みる。

2 ナウル島における日本人

日本人とオセアニアの人々とののかかわりは、大きく二つに分けられるであろう。一つは、ニューギニア、ソロモン諸島、ナウル島などに代表される戦争を通じての接触で、もう一つは、フィジ、マカテア島、ハワイなどに代表される出稼ぎ労働を通じての接触がある（Muhlhausler 1996）。

この章では1940年代のナウル島を対象を絞り、日本人との接触を見ていく。まず、オーストラリア側の資料を見ていこう。

（1）日本軍によるナウル島の空襲：1941年

日本軍の飛行機が12月とその翌月にナウル島に空爆を行った。

（Commonwealth of Australia 1966: 3）

日本軍によるナウル島への最初の攻撃は早かった。パールハーバーと同じ日（ナウルでは12月8日のことになるが）、日本軍の飛行機が上空を飛来した。翌日、外部との交信をする無線通信基地が攻撃された。（Garrett 1996: 13）

（2）盗み

日本人は車輪のついたものなら、何でも奪っていったわ。車にバイクに自転車に何でもよ。ナウル人は歩かされたわ。（中略）わたしたちはただ隠れているしかなかったわ。彼らは家の周りをうろつき、あるもの何でも持っていったわ。教会にも押し入って全て持っていったわ。（Garrett 1996: 30）

(3) 公開処刑

1942年9月6日、日本人がナウル島に来島してから2週間も経たないうちに二人の中国人が窃盗で処刑された、とパトリック・クックが記録している。そして、日本人の命令に従わない者は豚のように扱われると報告されている。(中略)今度はボリアンというギルバート人が二人のナウル人女性をレイプし、逮捕されたが、その際、日本人に抵抗したということで処刑された。この処刑は何百人というナウル人やギルバート人が見ている目の前で終わった。彼らは見ることを強制されたのである。(Garrett 1996: 31-32)

ナウル島の中国人の中には日本人の命令に背き処刑される者もいたが、ナウル人は最初はひどく扱われなかった。(Shaw 1967: 14)

(4) 学校

9月19日、日本人はアルボにあるカトリック教会で学校を開いた。それは主として若いナウル人に日本語を教えるためであった。(中略)わたしたちはよく教会の外側にある小屋に行って、日本語の試験を受けたものでした。(Garrett 1996: 32)

(5) 欧人を逮捕、監禁、そして殺害

日本人はナウル島に来島すると、すぐさま5人のヨーロッパ人管理責任者とBPCの職員全員を逮捕した。その5人の囚人はただちにナウル島にある日本の本部に監禁された。(Garrett 1996: 27)その後、この5人は殺害されている。(Garrett 1996: 165)

——7人のヨーロッパ人がナウル島にとどまる決意をした。以下の人たちである。Fathers Kayser, Clivas, Dr. Quin はか3名。(Shaw 1967: 13)

日本軍による襲撃ののち、5人のヨーロッパ人が処刑された。日本人はのちに彼らは米軍による空爆で死んだと嘘をついた。(Shaw 1967: 14)

Chalmers は1943年3月26日、日本軍に処刑された。(Macdonald 1985: 246-247)

(6) 行進

——わたしたちは日本兵が軍服を着て銃を所持し、道を行進するのを見た。頭を下げていなければ、銃で撃ち殺すぞ、と言われた。私は銃で撃たれないように地面すれすれまで頭を深く下げた。このことを知らなかったナウル人は日本人に平手打ちをされた。(Garrett 1996: 28)

(7) 強制労働, 強制移住

日本人はまもなくナウル島で勢力を拡大し始めた。ナウル島での主な任務は滑走路を三つ作ることであった。一番最初は現在のヤレン地区に作られた。二つ目はメネン地区で、三つ目はアナバー地区であった。

1942年10月3日、300人以上の日本人が軍艦でナウル島に到着した。そして11月の半ばには700人以上の日本人と韓国・朝鮮人が滑走路を作るために2隻の船に乗ってやって来た。その後、数週間以内に何百人というナウル人が作業をさせられた。

(中略) 私たちは家を取り壊され、ニボック地区に移され、小屋を建て、そこに住んだ。ボエ地区の人もヤレン地区の人もみな、そこに移って一緒に住んだ。(Garrett 1996: 33-34)

(8) 女性の労働

ナウルの女性は、日本人の看護、手伝い、料理、掃除をした。(中略) 日本人は器量のいい女を見つけては、自分の身の回りの世話をさせたわ。でも、私にはお声はかからなかったわ。幸運ね、とデヌガさんは笑いながら答えた。(Garrett 1996: 37)

(9) 乏しい食糧

1944年までに、ナウル島はしばしば空爆を受け、食糧事情は一層厳しいものになっていった。日本軍の食糧運搬供給船が2隻、連合軍の空爆で沈没したためである。人々は昆虫や種子やかぼちゃを食べざるを得なかった。(Shaw 1967: 14)

労働者は皆、ほんの一握りの米しかもらえなかった。女や子供たちもこれでは不十分で、このままでは飢えてしまう。パトリック・クックの記録によると一日につき一人当たり2ポンドの米と、10人で分けあうビーフの缶詰め一缶であったという。(Garrett 1996: 36)

(10) レイプ

デッダモ氏にとって最も困難だったことは日本人によるセクハラやレイプから、どのようにしてナウル人女性を守るかであった。ナウルには、他の多くの基地と違って慰安婦と呼べる存在はいなかったし、日本人も妻やガールフレンドを連れてきているわけではなかった。(Garrett 1996: 45-46)

(11) ハンセン病患者を海に沈める

フローレンス・デヌガさんによるとハンセン病患者は皆砂洲のところまで歩いて行き、ボートのあるところまで泳いで渡らなければならなかった。フローレンスと彼女の友人にはそのボートが壊れていて水が漏ることを知っていた。わたしたちには最後まで彼らの姿を見

ることができませんでした、と悲しそうに語った。(Garrett 1996: 55)

日本軍は直接的な手段でナウル島におけるライ病の問題を克服した。49名の病人をボートに乗せ、沖合いで沈めた。(Shaw 1967: 14)

(12) トラック諸島への強制移住とナウル島への帰還

1943年6月29日午後、国外に追放されるナウル人が集められた。日本人はわたしたちナウル人の家族をニボック地区のチャペルの外に集めた。その時の緊張や不安は今でもはっきりと覚えている、とモーラ・トーマさんは語った。6時頃、私たちは秋葉山丸に乗ってボート・ハーバーを出発した。(Garrett 1996: 53)

しかし、22年前の1946年1月31日、日本軍によって1,200人のナウル人がトラック諸島に強制移住させられたが、そのうち737人しかナウル島に帰還できなかった。残りの463名は飢餓や病気や日本軍の残虐な行為によって命を落とした。(Shaw 1967: 1)

1946年1月、737人のナウル人がトラック諸島からナウル島に帰還した。400人以上のナウル人が日本人によって殺された。(Legislative council of Nauru 1966: 5)

1,200人以上のナウル人がトラック諸島に移住させられた—多くのナウル人がトラック諸島で死んだ。そして戦争末期、750人の生存者がナウル島に帰還した。(Department of Foreign Affairs 1975: 3)

(13) オーシャン島民をナウル島に來島さす

——一か月後、日本軍は659名のオーシャン島民をナウル島に連れてきた。そして601名のナウル人をトラック島に送った。(Shaw 1967: 14)

これらの中で、一見すると、日本人とナウル人が接触したことにはならないと思われる項目もある。例えば、(9) 乏しい食糧、がそうである。しかし、後のインタビューの中にもあるようにナウル人はしばしば日本人の作るカボチャ畑に姿を見せ、日本人と接触をしている。これは乏しい食糧事情が招いた結果と言えよう。

オーストラリア側の資料で目立つのが、(5) 欧人を逮捕、監禁、そして殺害、を強調する点にある。この件はほとんどの資料に記されている。5人のオーストラリア人が処刑されたわけだから当然であると言えよう。

さて、次に日本側の資料を示し、オーストラリア側の資料と照らし合わせてみたい。オー

ストラリア側の資料と突き合わせる前に朝日新聞とシドニーモーニングヘラルドに掲載されたナウル島に関する記事を整理しておく。(朝日新聞 1941-1945)

掲 載 日	見 出 し
1941 年 12 月 10 日	ナウル島攻撃
1941 年 12 月 14 日	ナウル島(濠領)初空襲
1943 年 5 月 15 日	我防衛の最前線ナウル島真剣な対日協力 豪の魔手から島民解放
1943 年 10 月 2 日	ナウル島 来襲敵機撃墜
1943 年 11 月 8 日	ナウル島で一飛行艇撃墜
1944 年 1 月 29 日	ナウル島に敵機 守備隊奮戦
1944 年 7 月 10 日	ナウル島にも五十機来襲
1944 年 8 月 4 日	トラックで敵機撃墜 ナウル・ボナベにも来襲す
1944 年 8 月 13 日	ウオッゼ島に四發十七機 ナウルに六機
1944 年 8 月 15 日	ナウル・バボに敵機
1944 年 9 月 1 日	ミンダナオに敵機 ナウル・パガンなどにも来襲
1944 年 10 月 25 日	ナウル島に十数機
1944 年 10 月	皇軍の猛撃と雨に悲鳴一米記者従軍記 ナウル来襲で撃墜された友軍

- 09/ 12/ 1941 Japan Brings War to the Pacific
Japan Attacks by Air and Sea
- 10/ 12/ 1941 Big Japanese Offensive in Malaya Likely
AIF May be in action soon
Attacks at Many Other Points in the Pacific
- 11/ 12/ 1943 Nauru Island Shelled
- 20/ 09/ 1945 Japs murder Five on Nauru

以下に示すのが日本側の資料である。

(1) 日本軍によるナウル島の空襲

メルボルン発電によれば、カーチン濠首相は八日「日本軍はナウル島(英委任統治領)を攻撃した」と発表した。(朝日新聞 昭和16年12月10日)

(2) 盗み

日本軍は車両をナウル島に持ち込んだはずだ。島にはバイクや自転車はなかった。ただ、リン鉱石会社のトラックは奪ったのではないか。(ナウル通信会 K 氏 筆者の電話によるインタビュー)

(3) 公開処刑

詳細はわからないが、日本軍上陸当初、日本軍に従わないものは見せしめとして処刑があったと聞いている。でもそれはナウル人ではなかったようだ。(ナウル通信会 K 氏 筆者の電話によるインタビュー)

(4) 学校

——その年の九月二十六日には日本語学校が開設され、言語を通じての啓蒙も始められた。少年少女に混じって大人達の元気な姿も見えた。既に十二月二十六日には第一回卒業生六十一名を出したがこれらの人達は何れも新しいナウル島建設の急先鋒となって働いている。(朝日新聞 昭和 18 年 5 月 15 日)

(5) 欧人を逮捕、監禁、そして殺害

もう一つ、事実らしいことでは、当時、七人の白人が残っていたのですが、その中の五人を夜中に連れ出して殺したということです。その夜、日本軍は、あと二人の白人—教会の神父とその助手—をトラックに乗せて、島の中を一晩中走り、五人の処刑を見せず、その五人は連合軍の爆撃で死んだと説明したということです。しかし、終戦後、この処刑は事実と認められ、それに関与した日本兵は濠州に連行されて絞首刑になったそうです。(石川 1980: 44)

(6) 行進

訓練のために、道を行進したことはある。偉い人が通るときに道の横にすわせたことはあっただろう。(ナウル通信会 K 氏 筆者の電話によるインタビュー)

(7) 強制労働、強制移住

主として、設営隊と称する軍属の労務者が当たっていました。現地島民も若干労務に使役しました。(ナウル通信会 K 氏の筆者にあてた手紙)

(8) 女性の労働

士官級の人が、若い女性を使って、女中の的なことはさせていたようだ。われわれ末端の兵士にはそのような恩恵はなかった。(ナウル通信会 K 氏 筆者の電話によるインタビュー)

(9) 乏しい食糧

毎朝昆虫がいらないので南瓜の交配、摘芯を行い蔓がのびれば又苗床へさし植して増産へと励む。(ナウル通信会 1986: 37)

(10) レイプ

聞くとところによると、当時の 40 才から 50 才くらいの上級士官との間でそのようなことがあったと聞いている。(ナウル通信会 K 氏 筆者の電話によるインタビュー)

(11) ハンセン病患者を海に沈める

日本軍が上陸した当時、ナウル島には十名ほど(一説では 49 名)のライ患者がいて、避病院に入っていたのですが、日本軍はこの患者を大変神経質に扱いまして、聞くとところによりますと、ある晩、全員をボートに乗せて沖に連れて行き、沈めてしまったということです。これについて、デロバート大統領に伺ったことがあります、「それは事実だが、止むを得なかっただろう。ナウルでも、従来、レプラ(癩病)については、大変問題にして困っていたのだ」という意味のことを述べておられました。(石川 1980: 44)

(12) トラック諸島への強制移住

1943 年の六月には、ナウルでは食糧が極度に不足してきましたので、現地の司令官(副田大佐)の一存で、島民の多くをトラック島に移住させることになり、第一回は六百人で、その団長は当時のハリス大酋長でした。そのころ、トラックの司令部は夏島(現在のデュブロン島)にあり、すでに五、六万人の軍隊および民間人がいましたので、ナウルからの移住者は、水曜島(現在のトル島)にあった南拓の農場で預かりました。(石川 1980: 44)

(13) オーシャン島民をナウル島に来島さす

さて六月下旬、さらに約千名の日本軍増援部隊が到着し、ナウルの人口は約六千人になった。ここで補給に苦しむ日本軍は、デツダモ大酋長をはじめとする六百人のナウル人と七名の中国人を、トラック諸島の一島に送り出した。ところが翌月、日本海軍はオーシャン島から六五九人のギルバート諸島民を連れてきたばかりでなく、さらに八月には約 1,200 人の陸戦隊が増派されて到着したために、カイザー牧師を含む 601 人のナウル人を再びトラック諸島へ送り出したのである。(中島 1986: 8)

以上、日本軍がナウル島で何をしたのか、ということの日豪双方の資料を比較対照させながら見てきた。その結果、13 項目中 10 項目近くが一致する内容であった。しかもそれらはほぼ同じようなことを述べているので他の確認できなかった項目についても期待ができる。

これらの資料を通して気になるのは、日本もオーストラリアも自分たちにとって都合の悪いことは、非人道的なこともあってか表面に出そうとしない点にある。例えば、豪州軍は終戦処理の一つとして、日本人ナウル部隊をブーゲンビル島の近くのピエズ島へと移住させた。しかし、ここはマラリア蚊の絶好の繁殖地でしかも十分な治療剤がないのを知りながら、日本人を拘留したという。これは立派な戦争犯罪であると指摘するオーストラリアの学者もいるという（ナウル通信会 1989: 58-59）²⁾。またナウル、オーシャン部隊の二十余名がなくなったトロキナの死の行軍のことを伝えていない（その後、オーストラリア戦争記念館の協力で、いくつかの文献があることが判明した）。逆に、日本側の資料には5人のオーストラリア人の処刑や公開処刑の事実などが記されていない。日本側の資料は、トロキナの死の行軍とピエズ島のマラリアによる死亡が強調されているだけである。しかし、これも先に述べた理由と同じで多くの日本人が亡くなっているわけだから当然であると言えよう。いずれにしても次の Pollock (1991: 104) の文章がこの島の悲惨さを物語っている。

アメリカ人はわたしたちナウル人に爆弾を落とした。

オーストラリア人は明らかにナウル人を見捨てた。

そして、日本人はナウル人をひどい目にあわし、飢えさせた。

3 ナウル島の日本語教育

わたしたちが確認をすることのできた項目の一つに日本語教育の問題がある。しかし、朝日新聞の記事はオーストラリア側の資料と対極的な内容となっている。これはおそらく当時の新聞の使命と言わざるを得ないものであって、日本軍の攻勢を日本国民に幅広く新聞を通して伝え、国民の意識を高める狙いがあったのだろう。どんな小さな島でも日本軍が攻勢であると見ればすぐに活字にしていたように思われるし、戦局が不利になってからでも日本国民にとってマイナス効果があると見れば表現を柔らかくしている。オーストラリア側の資料からもわかるように1944年のナウル島の日本軍は連合軍の空襲で最悪の状況であったのだろう。しかし、新聞では劣勢を伝える内容となっていない。次の記事はまだ日本軍の攻勢が続いていたときで余裕があったのだろう。ナウル人の意識はこの記事に書かれている内容と正反対であることに注意したい。ただ、学校で日本語教育が行われたことは事実と言えるだろう。

2) ナウル通信会によると、ほとんど日本軍と交戦をしていないオーストラリアがこのような行動に出たのは、フィリピンのバタン半島の死の行進の復讐である可能性が高いという。（ナウル通信会 1989: 77）。しかし、戦勝国の特権であるとする意見の方が多い（その後のインタビュー調査による）。

皇軍将兵と島民協力

敵の反攻企図に対する鉄壁の備えと、産業の改廃、島民の宣撫とは併行して進められていった。秋には治安維持会が結成され、大酋長デット・ダム氏が会長に就任し新しい島政が布かれて顔色は見るうちに全島に充満した。千七百の島民は日本への協力を心から願い米英撃滅、大東亜建設の決意はいやが上にも高まった。もはや怠惰な姿は消え、リン鉱採掘上にも波止場にもヤシ林にも元気に働く島民の姿が満ちていった。その年の九月二十六日には日本語学校が開設され、言語を通じての啓蒙も始められた。少年少女に混って大人達の元気な姿も見えた。既に十二月二十六日には第一回卒業生六十一名を出したがこれらの人達は何れも新しいナウル島建設の急先鋒となって働いている。こうしてわが陸戦隊の苦心は遂に報いられたのである。記者がこの島を訪れたときには、戦火に破壊されたリン鉱施設や波止場なども島民の勤労によって着々と復旧し皇軍将兵と島民のほほえましい協力親善の風景は至るところに見られた。どの島民の顔にもハツラツとした生気があふれ、その眼には日本に対する深い信頼をたたえ、清新の息吹きと盛り上がる力が随所に感じられた。埋蔵量一億トンのリン鉱と多額のコプラを産出する宝庫ナウル島がナウル人のために、大東亜民族のために本格的に開発される日は近い。(朝日新聞 昭和18年5月15日)

3. 1 日本語教育の目的

ナウル島がソロモン諸島やニューギニア島ほど戦略的に重要ではなかったにせよ、日本軍がナウル島を占領してから一ヵ月もしないうちに学校を開いている。この点は他の占領地との違いはない。また、日本語や日本の歌やあいさつの仕方などを教え、欧米的な発想を排除する試みは同化主義的なアプローチでやはり他の占領地との違いはなかろう。

一般に、南洋群島においては日本語が多言語状態を止揚する共通語としての役割を果たすと考えられた(川村1994:17)。ミクロネシア地域のほとんどがオーストロネシア語族に属するとは言え、島同士の言語で簡単に意思疎通ができるほど均質ではなく、雑多なので、そのように考えられても不思議ではなかろう。ナウル島は南洋群島と日本軍による統治期間が等しくないで同列には扱えないが、ナウル語が周辺で話されているツバル語やキリバス語と意思疎通ができないほどかけはなれていることを考えれば、ここナウル島においても同様の発想があったとしてもおかしくはない。新聞記事にもあったように、日本語は大東亜共栄圏の共通のことばとして、ここナウル島でも教育が行われたのであろう。日本語帝国主義としての発想が、他の占領地と同様にあったであろう。

植民地教育史研究年報(1999:80-81)によると日本語教育のことが次のように記されている。

アジアにおける日本語の「国語」化ないし日本語の「東亜共通語」化の主張が行われたこと

このように日本語教育というのは現地住民を同化するための一つの手段であることがわかる。次の事例はそのことをよく示している。

9月19日日本軍はアルボにあるカトリック教会に学校を開いた。主に若いナウル人に日本語を教えるためであった。パトリック・クックもエドウィン・ツィツィもデログ・ギオウラもアルフィー・ディックも皆学校に参加した。ここでは若いナウル人たちに日本語の基礎を教えた。結果として、多くの生徒は大胆になった。「私たちはよく小屋に行って日本語のテストを受けました。わたしたちはただ日本人に「こんにちは」と言いにくくだけでした。——そして、実際、日本人と会話を始めました」エドウィン・ツィツィはこのように思い起こしました。そして徐々に日本兵もわたしたちが日本語を言い間違えると訂正をしてくれるようになった。(Garrett 1996: 32)

8月の始めに、日本軍はちょうどニボック地区にある本部の裏に学校を開いた。バイオレット・マッカイはその学校に参加した一番若い子供達のうちの一人であった。日本語の九九や歌やあいさつやおじぎの正しいエチケットを学習したのを覚えている。(Garrett 1996: 166)

大橋 (1998: 41) によると、今日のヤップ島では戦後、ヤップの若者の間で礼儀作法がかなり乱れ、親が日本語や日本のマナーを子供たちに強く学ばせたいと思っているという。それだけ、1940年代に日本語教育を受けた世代のインパクトが強く残っているのであろう。「桃太郎さん」の歌も今だに人気が高いという。

トラック諸島では、戦前、日本語教育が行われ、約9,000人のトラック人が流暢な日本語を話していた。そして戦争が勃発すると、すぐさま日本帝国軍に志願して協力を求める島民がいた。また、日本語を話すナウル人に対しては、通訳や隊長としての任務を課している(後述)ところから、同化政策の一環で、日本への忠誠心を養うという意図もあったろうが、前線に立つ即戦力として期待された部分も大きいと思われる。ナウル島における日本語教育が、周辺の島々に対して行われたのとそれほど大きな違いがあるとは思われない。欧米的な発想をナウル人から取り除き、大東亜共栄圏の一員としての自覚を促すという意図があったと考えられる。

3. 2 日本語の実態

トラック諸島に強制移住されたナウル人に身体検査を行った軍医であるF氏は、筆者のインタビュー（2000）に次のように答えている。このインタビューの目的はトラック諸島に移されたナウル人が日本語とどのように関わっていたかを探るためである。なお、日本語の使用とは関係のないことも記しているが、これは当時のナウル人の日本語との関わりを詳しく思い出してもらうためである。以下、筆者の質問は省き、F氏のことばだけをまとめた。

私がナウル人に身体検査を行った主目的は、トラック島に連れてこられたナウル人がレプラや梅毒にかかっているかどうかを見極めるためでした。当時はこんなことを大きな声で言えませんでしたからね。今ではレプラは治る病だが当時はほんとうに恐れられていましたからね。検査の結果、レプラも梅毒もかかっているナウル人はいなかった。ナウル人の男女比は半々であった。子どもが3分の1いたかな。ナウル島でレプラ患者が海に沈められたと当時うわさで聞いたが、私が出会ったナウル人は隊長クラスの人が片言の日本語を話す程度で、ナウル人が歌う歌や踊りは全てナウルのものでした。「桃太郎さん」を歌っているナウル人は見たことがありません。ひょっとしたら私の後にトラックに駐留した日本人が教えたかもしれませんがね。トラックでは沖縄出身者が百数十人はいたかな。加えて朝鮮から囚人も連れてこられた。政治犯ということで連れてこられたが、滑走路を作るために人手が必要であったようだ。ナウル人の中にスパイがいやしないか、日本軍は初め、気を使った。今でも印象に残っているのはデロバート君のことで、彼はほんとうに統率力があり、友好的で、今で言うところのネアカでのんびりした性格の持ち主だったように思える。それにナウル人はもぐるのがうまかったなあ。ナウル人は水曜島の一角に住まわされたが、ヤシ酒を日本人に振る舞うなど友好的であった。ちなみに当時、トラック人の中ではヤシ酒は禁じられていたが、ナウル人の民家を回る際、ナウル人に対してセクハラはありませんでした。私は富山の第一大隊の軍医で連隊長の部下であったが、この連隊長は国際的な感覚が豊かで、和やかな人物であった。ナウル人に対してはいっさいひどいことはしなかった。私は昭和18年12月24日にトラックにつき、昭和19年2月17日に水曜島についた。日本に帰国したのは昭和20年12月24日だから、丸二年、トラック諸島にいたことになる。トラックに連れてこられたナウル人は学校に通う余裕などはなかった。もちろんトラックに公学校はあったが、ここ水曜島でナウル人に日本語を教えるだとか、日本語の芝居を演じさせるとか、日本語のスピーチコンテストを実施するとかいう余裕はなかった。ナウル人向けの日本語新聞とか、日本語で書かれた看板や道路標識などももちろんなかった。ただ、沖縄の人が日本人向けに発行していた新聞はあったと記憶してい

る。しかし、それもすぐに廃刊になったはずだ。したがって、君が代をナウル人に強制するということもなかった。ナウル人とトラック人との関係については、交流があまりなかったと言える。むしろ、トラック人はナウル人に土地を奪われるのではないかと不安に思っていたようだ。

さらに、藤記（1981：23）では、ナウル人が日本人の前で踊りを披露する場面に居合わせ、次のような思い出を記している。基本的なあいさつや敬礼の仕方をすでに身につけていることがうかがえる。

……お伽の国へ迷い込んだような華やいだ雰囲気、もう三つ四つから七つ位までの子が二十人程も道で会うとずらりと列んでてんでに「コンニチワ」と挨拶するさまは全くの沸くような壮観、先程も教会堂の前でふとカメラを向けると、いや押し合いへし合い列ぶわ列ぶわ、遠くから駆けつけてすは一大事、やにわに割り込もうとするやら、しなをつくるやら、のび上がるやら、小さな子をかばうやらいやはや大変な騒ぎ ……（中略）さてそれらが一しきり騒ぎ立てやがて静まりかかる、と酋長の号令で「右へ列へ」まず男、女それから子どもの順に各二列横隊に整列、何とか真面目な顔になって「敬礼」ここまでは日本人が仕込んだこと、それから先は彼らのオリジナルとなる。

また、ナウル通信会の神西（1986：72）は、ナウル島の言語状況を紹介する欄で、「トラック諸島に移住した住民もおり日本語は比較的意志は通じる」と記している。

昭和18年6月から終戦までナウル島にいたナウル四高会のK氏は筆者のインタビューに次のように答えている。

我砲射隊は、任務上、砲台から離れるわけにはいかず、島民との交流はさほど多くはなかった。ただ、わたしは本部に度々出入りしていたので、少しは地元民と日本人との関係についてはわかる。ナウル人はよく、日本バンシャイ！海軍バンシャイ！天皇バンシャイ！、と言っているのを耳にした。桃太郎さんなど幼児向けの歌は教えられていたようだ。全般的にかなり日本語がじょうずになったものもいるよ。われわれが作るカボチャ畑にもちよくちよく顔を見せ、フレンドリーな連中だったな。われわれが島民をいじめたということはなかったよ。ピエズ島での出来事は、今でも思い出すと、怒りで体が震える思いだ。戦後処理の一環として、オーストラリアは我々をマラリア蚊の大発生地帯であるピエズ島に送った。蚊屋を取り上げられたことは今でも忘れることができない。また、金歯や腕時計を奪われたのも許すことができない。

また、ナウル四高会の H 氏は筆者のインタビューに次のように答えている。

わたしは昭和 18 年から終戦までナウル島にいた。任務上、砲台から離れるわけにはいかず、地元の人との接触は多い方ではなかった。しかし、たまにわたしたちのいるところに、やってくるナウル人がいて、どこで覚えたのか、ありがとう、こんにちは、いいおてんき、などといった日本語を使っていた。わたしのきくところによると本部の連中が、簡単な日本語を教えたらしい。上陸当初の日本軍は、ある程度、地元の人に対して厳しく当たったかもしれないが、私のグループは地元の人と仲良しであった。ケガをしたナウル人に薬を与える軍医もいた。最終的に首実験もあったが、我々の中からは、豪兵に連行されるものはいなかったよ。

これらの証言からわかることは、上陸当初の日本兵と昭和 18 年以降にナウル島に来島した日本兵との間には、行動上、大きな違いがあるかもしれないということであろう。

一般に当時、日本語を学習する機会は男の方が多かったという (Garrett 1996: 108)。これは日本軍と協力して敵と戦うための即戦力が求められたからであろう。しかし、だからと言って、ナウルの子女の日本語の習得が男子よりも低かったかというそうではないだろう。筆者はむしろその逆であると考えている。ナウルの子女は日本兵のために料理や掃除や看護をしている (Garrett 1996: 78)。また、慰安婦や飲み屋の女として日本人に接する機会が多かった (Viviani 1970: 82)。さらには、ナウルの子を披露し、日本兵からお金をもらっていたという報告もある (Garrett 1996: 63)。つまり、男子よりも女子の方がもっと身近に日本兵と接した可能性があるのである。日本兵に協力する男子の場合は島民のグループの中で一人リーダーシップを取れる存在がいれば島民を掌握できるので、必ずしも男子の方が全体的に日本語能力が高かったとは言えない。多仁 (1992: 39) によると、ポナペ島では、ボーイの制度というのがあり、日本人の家庭に行き、子守り、掃除、皿洗いなどをさせられたが、このことが日本語の勉強にたいへん役に立ったという。つまり、学校で授業を受けるだけではそれほど日本語能力は上達しなかったということである。ナウル島では、次のような場面がひんぱんにあったことが予測される。

その日本兵はバイオレットに日本の歌を教えた。しかし、そのことは彼女にとって悲しい記憶として残っていた。なぜならば彼は自分の置かれた立場にひどく落胆し、たびたびやるせない気持ちで涙を流していたからである。(Garrett 1996: 164)

さて、ナウル人はどのような証言をしているのであろうか。ナウル島での日本語教育の実態を把握するために、ナウル人に聞き取り調査を行った。調査対象は男性 3 名、女性 3 名で、

年令, 出身, 学校参加の有無, 学習期間, 学習場所, トラック諸島移住の有無についても調べた。調査の時期は 2000 年 5 月 25 日から同年 6 月 15 日までである。

	性別	年令	出生地	学校	期間	学習場所	トラック諸島
W. S	男	74	ボエ	有	1	アイウオ	有
D. T	男	69	アイウオ	有	6～7	エワ	無
D. A	男	67	ボエ	有	1, 5	ニボック	有
B. W	女	75	ニボック	有	12	ニボック	無
W. B	女	79	バイティ	無	—	—	有
T. W	女	74	ヤレン	無	—	—	有

また, 学習内容, 教師, 教材, 日本語に対する態度については以下の通りである。

(1) どんなことを学習したか。

ひらかな, 九九, 読み物無し, 基本的なことば, 日の丸, 君が代, ゴンゴンマーチ, ラジオ体操, おじぎ, 日本の伝統, マーチングソング

(2) 教師はどのような人であったか。

紳士, 一般人, 南拓の人, 40～50 才

マーシャルの女性とコスラエの男性, 日本人に信用されていた

紳士な日本人, 40 代の男性, マーシャルの女性

(3) どんな教材を使用したか。

黒板を使って書き方を学んだ, プリント教材を使用した, リーディングとライティングのみ

(4) 日本語学習をどのように考えていたか

利益があった, 刺激があり楽しかった, コミュニケーション上, 覚える必要があった, 学校への参加に関して, 強制はされなかった

さて, 次に今回聞き取り調査によって得られた語彙や表現をもっと詳しく見てみよう。語彙に関しては, 数字, 食べ物, 学校での活動, 日常的なことがら, 戦争に関するもの, その他とある。

1. 数字, 曜日, 九九

イチ, ニ, サン, シ, ゴ, ロク, シチ, ハチ, ク, ジュウ

ゲツヨウ, カヨウ, スイヨウ, モクヨウ, キンヨウ, ドヨウ, ニチヨウ

ア, イ, ウ, エ, オ, カ, キ, ク, ケ, コ

2. 食べ物

ゴハン、コメ、サケ、ミズ、カボチャ、タクワン、メン、ブタ

3. 学校に関するもの

ガッコウ、センセイ、セイト、ベンキョウ

4. 日常的なもの

ドロボー、オドリ、ウタ、センタク、サラアライ、ソージ、シゴト、ビョウキ

5. 戦争に関するもの

ヒコーキ、クルマ、グンカン、ヘイタイ、タイチョウ、ホンブ、カイゲン、ナカヤマ、ソエダ

6. その他

オトーサン、オカーサン、オトコ、オンナ、オトナ、コドモ

これを、さらに別の角度から見てみよう。次の表は112の日本語の語彙を今でも覚えているかどうか、ナウル人に尋ねたものである。その結果、全体的な傾向としてはほとんど男女差が認められないのに、掃除や料理や看護にかんする語彙は女子の方が、軍隊や労働に関する語彙は男子の方がよく知っていることがわかった。これは戦時中における男女の違った役割を反映しているものと思われる。

領域/性別	男	女
料理、掃除、看護 *1	29.5%	39.6%
労働、軍隊 *2	48.1%	36.1%

*1 メシ、ゴハン、カボチャ、コメ、ニク、ヤサイ、サケ、ミズ、カンゴ、センタク、サラアライ、タクワン、サイダー、リョウリ、ビョウイン、ソージ

*2 カッソーロ、グンカン、ツヤク、タイチョウ、ビョーキ、カイゲン、シゴト、フネ、トラック、ドーロ、ヒコーキ、クルマ、ジテンシャ、バイク、ドロボー

次に日本語の表現について見てみよう。初期の接触の際にありがちな命令調の表現が多く見られる。また、過酷な労働を回避する表現や基本的なあいさつも多く見られる。

7. 滑走路建設の際に用いられたと思われる表現

ミービョウキ、ハライタイ、アタマイタイ、バカヤロウ、バッキヤロウ、バカト、クラ、

コラ, ダメダナー, コマッタナー, アブナイネー, イタイナー

8. 基本的なあいさつに関する表現

オハヨウゴザイマス, サヨナラ, コンニチワ, アリガトウ, アパガトウ, ゴメンナサイ,
トモダチ

9. 食事に関する表現

ウマイナー, カライナー

10. 命令に関する表現

イケ, イゲ, コイ, コチコイ, カエレ, キョウツケ, キオスケ, ヤスメ

11. 戦争に関する表現

ダイニッポンテイコク, ボウクウゴウ, ダイヘンタイ, ジョウクウ, バクダントウカ

12. その他

チョットマッテクダサイ, ウツクシイ, ビジン, ワタシノコイビト, アノネ, コレワ,
ソレワ, オバサン, ベンジョ, イマ, ヨロシイナ, ヨリシイナ, オンナノムスメ,
オンナノムシメ, アルカ, アル, アリマセン, ワカル, ワカラナイ, ワカリマセン,
ワカルカ, ホントカネ, イキマショウ, イゲマショウ, カエリマショウ, カエレマショウ,
ソーデスカ, ソーデスネ

13. もとの意味から変化したもの

ナベ (パーティーの時に使う大きくて分厚い特注のナベ>ただのナベ)

アタマ (バカ>アタマ)

タラマタ (ズボン一般>サルマタ)

以上のことから、ナウル人は戦時中、基本的な日本語を学習したことがわかる。“ミー
ビョウキ”のようなピジン化したと思われる表現も見受けられる。おそらく、“ミー”は既
存のピジン英語から引き出されたものであろう。そして、“ビョウキ”というのはナウル人
が滑走路建設という重労働から逃れるために必死に覚えた表現であると思われる。この
“ビョウキ”という表現に日本語のデスやダといったモダリティが加わって表現されたなら
ば日本語の文法性をより帯びていたと言えるであろう。おそらく、このような表現は他にも
多くあったであろう。しかしながら、それは労働という限られた文脈で用いられる表現にす

ぎず、個人差も大きかったと思われる。したがって、このピジンが労働者の間で、また、日本人と労働者との間で定着していたとは言えないかもしれない。

また、簡略化された日本語表現も上記との関連を考える上で重要であろう。例えば、

- (a) ハラ イタイ
- (b) アタマ イタイ
- (c) ミー ビョウキ

(a) も (b) も、焦点をあらわす助詞の“ガ”が省略されている。しかし、おおくの日本人もこのような文脈で、特にインフォーマルな文脈で省略する傾向があるので、一概にナウル人特有の日本語表現とは言えない。(c) では対照をあらわす“ワ”が省略されているが、ここでも多くの日本人が“ワ”を省略するので、ナウル人特有の文法現象とは言えない。また、ここでは話し相手が誰かによって語形が変わる“デス”が脱落しているが、これらは日本語を習得していく過程での一種の中間言語であるとも言えるかも知れない。

近年、日本ではピジン日本語の資料収集を行う動きが見られるが、これらの記述的な研究資料と照らし合わせていく必要があろう。また、ピジン英語との関連も研究されねばならない。ナウル島に関しては、多くの中国人が戦時中、島を離れ、ピジン英語の社会的機能が縮小したことは事実であるが、戦後、人口が回復し、再び、それが使われ出したことを考えれば、ピジン英語はむしろ温存されていたと言えないだろうか。ナウル人にしても、以前と同様の職種についたり、コミュニティ活動をすることを許されていたことを考えればピジン英語が三年間という短い占領期間の間に葬り去られたとは考えにくい。川村（1994: 123）によると、戦時中の文化人の中には、ピジンや現地語を占領地で使用した方がよいとする考えを持つ人もいたという。

3. 3 ナウル人の日本語に対する態度

強制的に日本語を学ばされたナウル人の側には、強制的に日本語を教えられることのストレスの他に、日本語能力が高まれば仲間内から裏切り者扱いをされるという緊張感もあったようだ（Garrett 1996: 108）。日本語能力が高まれば、通訳の仕事に就いたり、重労働を免れるからである。仲間から冷たい視線を向けられることは二重の苦しみであっただろう。当時の日本兵はこのことに気付いていたであろうか。

ジェームズ・アンギメアはよく考えた上で日本語を学ばないことにした。「私は日本語を学びたくない。日本人が嫌いだし、——日本語が必要だとは思わないから。」と、つっけんどんな調子で言った。このように決心したのは個人的に抗議をるもの

で、他の道を選択したナウル人に対して強く抗議をするものである。(Garrett 1996: 108)

つまり、日本語の習得が日本軍占領下におけるナウル社会でのナウル人の地位向上に役立つという現実的な利益があった反面、仲間からは裏切り者というレッテルをはられる一面もあったことになる。日本語の運用能力を向上させ、何とか浮かび上がりたいという状況にさせたのは他の多くの占領地でも報告されている。当時の日本軍には統治を円滑に進めることしか頭にはなかったのではなからうか。トラック島に移住させられたナウル人が日本語をじょうずに操り日本軍に協力しているトラック人を見て、かれらは皆裏切り者であると感じたという。

シオト島では、トラック人は日本の権力者たちと良好な関係を作っていた。そしてトラック人はナウル人が自分たちのことを皆裏切り者であると思っているということを報告した。(Garrett 1996: 108-109)

また、日本の敗色が濃くなるとトラック諸島のナウル人は小さな学校を開いてナウル語やトラック語の授業をしている。南洋群島におけるように、日本人がナウル語を学習すると言った光景はなかったことも推測できる。

アロイもアングメアも小さな学校を開いて、誇りをもって日本語ではなくナウル語やトラック語を教えた。ケケはアロイの学校に参加した 25 人から 30 人の子供たちの一人であった。わたしたちは再びナウル語を学習し始めたのである。それが唯一のトラック島での教育と呼べるものであった。(Garrett 1996: 133)

日本軍降伏から二日後、学校は閉鎖され、そのとき将兵が我々日本人はまもなく日本に帰るということ、ここで学んだことを忘れないようにと短いスピーチをしたという (Garrett 1996: 167)。インドネシアのように戦後も日本語教育熱が冷めなかったところもあるが (多仁 1999 によるとインドネシアは独立という概念を日本に付与されていた) ナウル島ではそのようなことはなかったようである。ただ、戦後しばらくの間、学校で、生徒の行いを正すために君が代を斉唱することが続いたという (筆者の聞き取りによる)。

4 日本語教育の功罪

一般に、どの地においても、1940 年代の日本語教育に対して、二つの見方があるように

思える。例えばフィリピンでは日本語教育がタガログ語の公用語化に貢献したという見方と皇民化主義による影響で、民族の主体性が損なわれたというネガティブな見方とがある（多仁 1999）。

また、インドネシアでも日本語教育が国語としてのインドネシア語の普及に貢献し、インドネシア人に民族的な自覚を促したという見方と、強制的なやり方に反感を買っていたという見方とに分かれる（多仁 1999）。

しかし、これらの見解は主に占領者側の論理である場合が多く、被占領者側の論理が欠落している場合が多い。ナウルの場合を今ここで私が記したとしても、それは日本人側の見方に過ぎないであろう。今後ナウルの人々に尋ねるという作業が必要になってくるであろう。

1. トラック諸島やオーシャン島など他のミクロネシア世界を知ることになった。同時に日本人という中国人以外のアジア人をも知ることになった。
2. オーストラリアへの依存をより一層強めることとなった。
3. 日本軍から受けた被害意識が温存され、拡散せずに、反感を招いたままである。
4. 日本語教育はナウル語の公用語化に貢献していない。

5 ま と め

以上、検討してきたことを総合的に考えるならば、ナウル島で行われた日本語教育は他の占領地で行われたものと基本的には類似していると言えるであろう。すなわち：

- i) ナウル島における日本語教育の目的は、ナウル人を大東亜共栄圏の一員として、その自覚を促すというものであると考えられる。また、戦闘においては自ら率先して日本軍に協力することが求められた。
- ii) ナウル人が戦時中、学校で学習したものは次の通りである：九九、歌、あいさつ、日本の伝統、ラジオ体操、基本的な日本語など。
- iii) 日本語を教えた教師は南拓から派遣された数人の日本人男性とマーシャルの女性であった。
- iv) 教材に関しては、黒板を使ったり、プリント教材を使用した。テキストは用いなかった。
- v) 日本語に対する態度として、二つの種類があった。ひとつは、日本語を習得して、よりいい仕事に就き、社会での地位を獲得しようとするもの。もう一つは日本語学習者を裏切り者として位置付け、日本語に目をむけようとしなかったもの、とがあった。

今回のこの聞き取り調査で、まだ多くのナウル人が日本語を覚えていることがわかった。

戦後 55 年間、日本語が文化的社会的に全く機能していなかったことを考えると、この事実は当時の日本語教育のインパクトがたいへん強かったことを思わせる。

このように今回の聞き取り調査だけではまだまだ十全とは言えず、今後さらに資料収集を継続していく必要がある。またナウル島に限らず他の占領地ではどうかを探る必要があろう。

追記：日本では、筆者のインタビューに快く応じてくださったナウル通信会とナウル四高会の皆さんに心から感謝したい。オーストラリアでは、ナショナルアーカイブズ、ロイヤルオーストレイリアンエアフォース、ステイトライブラリー、オーストラリア国立大学、ニューイングランド大学、ミッチェルライブラリー、シドニー大学で貴重な情報や助言をいただいた。特に、元オーストラリア国立大学教授であるデイビッドスズンズ博士には数々のコメントをいただいた。また、ナウル共和国の教育省には地元でのインタビュー調査のお手伝いをしていただいた。ここに改めて感謝をする次第である。

参 考 文 献

- 石川二郎 (1980) 「ナウル」『太平洋学会誌』太平洋学会編集
 大槻 巖 (1985) 『ソロモン収容所』図書出版社
 川村 湊 (1994) 『海を渡った日本語』青土社
 崎山 理 (1995) 「ミクロネシア・ペラウのビジン化日本語」『思想の科学』三月号
 嶋津 拓 (1998) 「1990 年代前半のオーストラリアの新聞紙上に見られる「日本語学習不要論」について」『オーストラリア研究』第 11 号
 渋谷勝己 (1999) 「ミクロネシアに残る日本語—パラオの場合」月刊『言語』大修館書店
 多仁安代 (1992) 「日本委任統治下南洋群島ボナベ島における日本語教育について——公学校卒業生の聞き取り調査から——」『太平洋学会誌』太平洋学会編集
 多仁安代 (1999) 「日本軍占領下のフィリピンにおける日本語教育——『さむばぎいた』を通して——」『太平洋学会誌』太平洋学会編集
 多仁安代 (1999) 「日本軍占領下におけるインドネシアの日本語教育」『太平洋学会誌』太平洋学会編集
 ナウル通信会 (1987) 『ナウル島—ナウル守備隊の記録』山口県豊浦町、非売品
 ナウル通信会 (1987) 『ナウル島通信隊戦記—亡き戦友に捧げる鎮魂の書』非売品
 ナウル通信会 (1989) 『ビエズ島—統ナウル守備隊の記録』山口県豊浦町、非売品
 中島 洋 (1986) 「ナウル、オーシャンの日本海軍」『太平洋学会誌』太平洋学会編集
 中島 洋 (1987) 「第一次世界大戦において日本海軍にナウル占領の意図はあったか」『太平洋学会誌』太平洋学会編集
 日本植民地教育史研究会 (1999) 『植民地教育史認識を問う』皓星社
 藤記義一 (1981) 『トラック島の終焉——軍医の日記』凸版印刷株式会社
 松永秀夫 (1979) 「マカテア島と日本—仏領ポリネシアに歿した人たち—」『太平洋学会誌』太平洋学会編集
 宮城紀美 (1999) 「ミクロネシアに残る日本語—ボンベイ島からのレポート」月刊『言語』大修館書店

- 山口洋児 (1998) 「ミクロネシア資料文献解題——その 19 ——」『ミクロネシア』通巻 109 号, 社団法人日本ミクロネシア協会
- 由井紀久子 (1998) 「旧南洋群島公学校における日本語教育の諸問題」『無差』第 5 号
- 吉田恵子 (1995) 「南太平洋の地域開発における日本人移民の役割とその歴史的意義」『太平洋学会誌』太平洋学会編集
- 朝日新聞縮刷版〔復刻版〕昭和 16 年～昭和 19 年 日本図書センター
- Commonwealth of Australia. 1966. *Territory of Nauru*.: Report for 1965 – 1966.
- Department of Foreign affairs. 1975. *Outline of Nauru*.
- Garrett, J. (1996) *Island Exiles*. ABC Books.
- Legislative Council of Nauru. 1966. *Background of Nauru*. An Eric Associates publication
- Microfilms of Dixon Library. *Sydney Morning Herald*. 1941 – 1945.
- Muhlhausler, P. (1996) "Japanese Language in the Pacific" Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and the Americas. *Trends in Linguistics* Documentation 13 Mouton de Gruyter.
- Nauru–Ocean Force. "investigation of five atrocities–Nauru Island". 31/ 51 Aust Inf Bn (AIF). AWM 54.
- Nelson, Hank. 1998. "The Enemy at the Door: Australia and New Guinea in World War II," Seminar. Tsukuba University.
- Pollock, Nancy J. 1991. "Nauruans during World War II (ed.) White, G.M. *Remembering the Pacific War*. Honolulu: Center for Pacific Islands Studies.
- Shaw, Patrick. 1967. *Republic of Nauru*, An Eric White Associates Production.
- Sissons, David. 196 "The Fate of the Japanese Garrisons at Nauru and Ocean Is."
- Tyrer, T. G., *Nauru and Ocean Islands Story*, The New Zealand Dairy Exporter.
- Viviani, Nancy. 1970. *Nauru: Phosphate and political Progress*. Canberra: Australian National University Press.
- Weeramantry, Christopher. (1992) *Nauru: Environmental Damage Under International Trusteeship*, Melbourne: Oxford University Press.
- Williams M, and Macdonald, B. (1985) *The Phosphateers: A History of the British Phosphate Commissioners and the Christmas Island Phosphate Commission*, Melbourne University Press.